第 38 回日本受精着床学会総会・学術講習会
P-20
Web 開催,2020.10.1-23

GnRH アンタゴニスト経口製剤レルゴリクスの ART における調節卵巣刺激への応用

◎前田 優磨[1]、岡村 太郎[1]、菊川 忠之[1]、藤岡 聡子[1]、辻 勲[1]、福田 愛作[1]、森本 義晴[2]

[1]IVF 大阪クリニック　[2]HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】レルゴリクスは,子宮筋腫に対する治療薬として承認された GnRH アンタゴニスト経口製剤である．本研究では，レルゴリクスが生殖補助医療(ART)における GnRH アンタゴニスト法による調節卵巣刺激に応用できるか検討した.

【対象と方法】当院において 2019 年 6 月～2020 年 3 月までの間に，GnRH アンタゴニスト法による調節卵巣刺激を用いて ART を施行した患者 163 例 172 周期を対象とした．レルゴリクスを経口投与した 70 例 72 周期(レルゴリクス群)と従来から用いられている GnRH アンタゴニスト製剤のセトロレリクスを皮下注射した 97 例 100 周期(セトロレリクス群)の治療成績を後方視的に比較検討した．レルゴリクスとセトロレリクスは，主席卵胞が 14mm に達した時点から排卵誘起の当日または前日まで連日投与した．本研究は当院倫理委員会の承認を得て行った.

【結果】排卵誘起当日または前日の LH 値はレルゴリクス群でセトロレリクス群に比べ有意に低値であった(1.9±1.6 mIU/mL vs 2.9±2.4 mIU/mL: $p<0.05$)．両群とも早発 LH サージを認めた周期や早発排卵により採卵がキャンセルとなった周期はなかった．レルゴリクス群とセトロレリクス群間において，採卵数(14.0±7.8 個 vs 15.4±9.7 個)，成熟卵数(11.3±6.5 個 vs 12.9±8.1 個)，受精率(80.4% vs 79.1%)，胚盤胞到達率(66.5% vs 65.2%)，良好胚盤胞率(58.3% vs 58.8%)，臨床的妊娠率(57.9% vs 41.7%)には有意差を認めなかった.

【考察】レルゴリクスを用いた GnRH アンタゴニスト法による治療成績は，セトロレリクスと同等であった．レルゴリクスは安価で，かつ経口製剤で利便性が高いことから，ART において従来から用いられている GnRH アンタゴニスト製剤の代替として使用できる可能性が示唆された.